周辺からの記憶 45

2022 年度　東日本・家族応援プロジェクト＋

村本邦子（立命館大学）

早稲田大学災害復興医療人類学 WIMA の研究員になっているが、毎年開催されているシンポジウム「復興の人間科学 2024　福島原発事故 13 年の経験から学ぶー当時小中高生だった若者たちとの対話から＜第 3 回＞」に参加した。

第 1 部が若者たちの対話で、早稲田大学の学生が原発事故を経験した 4 人の若者と対話し、それぞれがその体験を紹介した後、本人からの報告があり、研究員がコメントした。私がコメントを担当した光雪さんは、小学 3 年生の時、伊達市で被災し、小学 5～6 年生頃から高校卒業まで福島市で育った。小学生の頃の記憶ははっきりしないが、運動会や鼓笛パレードは中止になり、長ズボンをはき、ガラスバッチをつけていた。「ほうしゃせいぶっしつ」という危険なモノが空気にあるという認識はあったが、時間がたつにつれ、「除染」「基準値以下」「再開」との言葉が増え、安全だと認識するようになり、中学生時代は原発や震災について考えた記憶はないそうだ。

高校 1 年生の夏に NPO 法人「アースウォーカーズ」のプログラムで 18 日間のドイツ・スタディツアーに参加し、ドイツの高校生と交流するなかで自分が何も知らなかったことに衝撃を受け、震災・原発事故について考えるようになった。沿岸部のフィールドワークに行き、福島の話を伝えたいと記者を志すようになった。大学時代は、強制避難区域に住む 4 人のドキュメンタリーも制作した。そして、この春、念願の新聞記者となり、さっそく原発事故の記事も書いた。

彼女の話を聴きながら、2011 年から毎年一緒にクリスマスカレンダーを作った福島の子どもたちのことを重ねていた。1 年目の様子、2 年目以降の変化。十年で何百人かの子どもたちと出会ってきたが、小学 3 年生、4 年生の女の子たちの顔が目に浮かぶ。あの子たちはどうしているだろう、大きくなっただろうなどと思い出すことがあったが、こんなふうに成長して社会に貢献してくれているのだろう。とても暖かい気持ちになった。彼女は今後もつながっていきたい素敵な女性だ。プロジェクトを通じて、いろんな縁が繋がっていくことを幸せに思う。

コロナ禍での第2ラウンド「東日本・家族応援プロジェクト＋（プラス）」

東日本・家族応援プロジェクトは 11 年で第 1 ラウンドを終え、12 年目からは第 2 ラウンド「東日本・家族応援プロジェクト＋（プラス）」として、復興とはまだまだ遠い福島を中心に継続することに決めた。これまでは、年 4 回、それぞれ 2 泊 3 日で、青森、宮城、岩手、福島へチームを組んで行っていたが、これからは、年 1 回の 4 泊 5 日で福島へ行く。多賀城（宮城県）では、現地の有志が実行委員会を立ち上げ、自主的にプロジェクトを続けてくれることになったので、時期を合わせ、福島に入る前に多賀城に立ち寄り、合流することにした。

東日本大震災から 12 年が経ち、プロジェクトの形も変わって、いったいどのくらいの院生が参加してくれるだろうかと心配していたが、驚いたことに 18 人もの院生が申し込んでくれた。これまでも年によって 6 名から 33 名までの院生が参加してくれていたので、18 人という人数は平均的とも言えるのだが、今年からは全員が一度にプロジェクトをやるので、1 ヶ所に行く人数としては最大数になる（これまで 1 ヶ所の最大は 13 人だった）。総勢 22 人という大人数で、しかもコロナ禍の状況はまだまだ厳しく、懸案事項が多く、嬉しい悲鳴を上げることになった。メンバーで相談して、現地の方々にご迷惑をかけないよう、メンバーも安全に活動できるよう、あれこれ知恵を絞りながらプロジェクトの実施方法を練った。

大所帯での移動には懸念もあり、院生メンバーを 4 班に分け、基本的に班単位で行動すること、受け入れ先や会場の状況によっては、参加者数を制限し、公式に設定するプログラムと並行して、万全に感染対策をし、ルールを決めて自由なフィールドワークを多く取り入れることにした。

2022 年 9 月 2 日（金）から 6 日（火）の 4 泊 5 日で開催したが、主な行程は下記のとおりである。

9月2日（金）
各グループフィールドワーク ・みやぎ民話の会交流会参加グループ@黒松市民センター ・せんだい3.11メモリアル交流館、 荒浜小学校 ・石巻
9 月 3 日（土）
おおぞら保育園懇談会@おおぞら保育園旧舎パンダのトレーラーハウス 多賀城プロジェクト@多賀城市文化センター 昼食、団士郎家族漫画展＆トーク参加 フィールドワーク ・都市型津波を学ぶ 3.11 語り部ツアー（タガの柵） ・東北歴史博物館 ・多賀城駅周辺散策
9 月 4 日（日）
東日本・家族応援プロジェクト＋プラス 2022 in 白河@白河市立図書館（りぶらん） 遊びの広場、おもちゃで遊ぼう 団士郎の漫画トーク スタッフ交流会と次年度に向けた反省会 ママカフェ@しらかわ震災11年を聞く （一社）未来の準備室、白河の高校生たちと交流@コミュニティカフェ EMANON
9 月 5 日（月）
福島県沿岸部フィールドワーク

・伝言館　展示物見学、館長・宝鏡寺住職早川篤雄氏、副館長安斎育郎氏の講話 ・震災遺構請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館 ・東京電力廃炉資料館、富岡町散策、原子力災害伝承館 報告会@古滝屋
9 月 6 日（火）
古滝屋震災考証館 F スタディ・ツアー

結果的には、人数が多かった分、多様なフィールドワークが行われ、多様な視点で報告が成され、メンバーの小さな物語が豊かに重ねられた。

9 月 2 日（金） みやぎ民話の会との交流会

この日のメインプログラムは、黒松市民センター（仙台市）にて、みやぎ民話の会との交流会だった。みやぎ民話の会顧問の小野和子さん、元双葉町住民の目黒トミ子さん、加藤恵子さん、島津信子さんからお話を聞かせて頂いた。

初めに代表の島津さんが、「東日本大震災やコロナの影響で、なかなか足を運んでお話を聞くこともできなくなったが、このような新しい出会いもあり、悪いことばかりではないんだな、このプロジェクトと関わらせてもらっていることも自分たちにとって意味がある」と言ってくださった。

小野和子さん

小野さんは今年 88 歳になった。民話の採訪を始めたのは 35~6 歳のことだった。岐阜県の飛騨高山の者で、縁あってこちらに来て、3 人目の子どもがよちよち歩き始めた頃から一人で宮城県のあちこちを知らないまま歩き始めたという。何のつてもないところから、一軒一軒、「こんにちわ。子どもの頃に聞いていたお話があれば聞かせてもらえませんか」と訪ねて回った。5 年ぐらいしたあたりから、人が入ってきてくださって、山田ゆうこさんが最初に入ってきて一緒に歩いてくださった。島津さんや加藤さんもみやぎ民話の会を通して手をつないで一緒にやってきた。

みやぎ民話の会草書という形で 15 冊ほど民話を活字にしてきたのと、民話の学校を開き、文字でなく直接、膝をつきあわせて昔のことを語りあうことで、立体的に民話を捉えるよすがになればと考えていた。

語り手は海辺の方が多く、例外なく家を流され、なかにはご家族を亡くされた方もいた。庄司アイさんが「形あるものはすべて流されたけれど、胸に民話がありました」と葉書をくれて、この尊い言葉を握りしめて、みなさんの経験を語ってもらうことにした。海の近くに被災された方をお連れするのはどうかという声もあったが、やはり海の近くで声を聞いてもらいたいと思った。

全国から 200 人ほど申し込みがあり、断るのが大変だった。6 人の体験の語りを聞けたことはよかった。みなさんと出会いがあり、こうして未知のみなさんとお眼にかかることができて嬉しく思っている。

民話と言えば、昔々あるところにと桃太郎など連想されるかもしれないが、昭和 30 年、日本が戦争に負けた頃、木下順二さんが夕鶴の芝居を書いて、それに民話劇と名づけられた。それが民話の言葉が生まれた始

めたとされている。文字通り民の話、人々が語り継いできたさまざまな話をひっくるめて民話と言っている。私たちの会では、採訪と言って、民話を聞いて歩くというのが一番大きな仕事と考えて行ってきた。歩いて聞いた話があまりにおもしろいものだから、活字にしてうすっぺらな冊子を出して百円くらいで買ってもらったりした時期もあった。訪ねていかなければそのまま消えてしまう話であることが多いから、何とか残せるものなら残したい。

私たちが考える民話という言葉の範囲は非常に広くて、昔々という話もそうだが、たとえば、戦争の時代に大事な息子が遠い戦地で亡くなる時に故郷に知らせを送ってきたというような不思議な話などもひっくるめて民話として受け取ってきた。そういう意味では、みなさんの周りにもいっぱいあるはず。それを民話として聴き取って記録する人がいないものだから、世間話のように消えていく。それは残念。その後を生きて行く人の使命ではないか。

短い話を語らせてもらう。聞きに行くと一番よく出てくる話。昔々、貧乏なおじいさんとおばあさんがいて、豆っこひとつぶ拾う。艶話で恥ずかしいが、この話は非常に多い。話を聞きに行って、「昔話って何だ？」と聞かれたら、昔々と・・と言うと、「なんだ、むかしっこって言え」と言われて。でも、この話は心を許さないとなかなか話されない。品のいい話ではないから、語り手の方々が心を許すと話してくださる。私もみなさんに心を許したから話した。

反射的にひとつぶの豆ごをネズミ穴に落としてしまう話を思い出す人もいるかもしれない。こっちの話が表の日の当たる話。最初の話は蔭にひっそりと隠れていて、なかなか表に出してもらえない。一口に民話と言っても、出てくる話と隠れている話がある。どの話にも二重構造があっておもしろい。昔々の話はいつも現在につながっている。

「ひとつしか覚えてない」とひとつだけ話す人もいるかと思えば、一番多く語った方は 273 話。南方町という仙台の中心部の米どころにお住いのナガウラセイイチさんというおじいさんは 273 話を語ってくれた。最初に語ってもらった時は、こちらも未熟で聞き漏らしたことがいっぱいあったと思う。最初 70 歳だったナガウラさんが 90 歳になった時、もう一度聞かせてくださいと、あんなにたくさんの話を覚えているはずはないと悪い心で頼んだら、「いいよいいよ」と、それから毎月一回、公民館で仲間と一緒に朝から晩まで 1 年かかって聞いた。こっちがくたびれても彼はいきいきと語ってらっしゃる。本当に驚いたことに、過去にテープ起こししたものを手元に置いて比べると、まったく同じ。これは本当に驚いたことだった。20 年経っても、「雪がのんのんのんのん降ってきてや・・・」と、同じ型が入っている。

とにかく時間を惜しんで歩き回って話を聞かせてもらった。みんなの周りにも、きっ

と叩かなければ聞けない話がたくさんあるでしょう。ナガウラさんの話は 3 冊にまとめさせてもらった。とりあえずは形にできたことが嬉しい。民話を語る人は特別ではなく、ごく普通の人で、その胸をたたく人がいたら、ひとつふたつと芋ずるのように出て来る。それまでは、胸に物語がしまわれて眠っている。その胸を叩く人がいるかどうか、叩きようによっては出てこないかもしれない。そんなふうに思っている。

加藤恵子さん

きのうナガウラさんの「ハナシ」の話を 35 年ぶりの小学校で語ってきた。おそろしい化け物退治の話。最後に男は化け物に噛みつかれたが、さっぱり痛くない、あれと思って鬼の口をあけてみると、「ハナシ」だったんだって。「ハナシ」の話、これでおしまい。

「これからそういう話をするからね」と言って始めて、最後に「オシマイ」の話をした。これは山形のヤマジアイコさんの本にある話。昔、おじいさんとおばあさんがいて、川からタンスが流れてきた。身分の高い人のタンスだから、一段ずつ着物を数え、「一番目を開けてお一枚、二番目を開けてお二枚・・・四番目を開けてお四枚」と。子どもたちは、「もっと聞きたい」と喜ぶ。言葉遊びみたいなものを子どもたちは喜んで聞く。子どもたちは、「たくさん覚えていてすごいね」と言うが、覚えているのではなく、絵を頭においてそれを語っているんだなと最近わかってきた。

2 泊 3 日で南三陸でやった民話の学校が終わって、小野先生とイリヤというトンネルを抜けて高速で帰る予定だった。トンネルを越えたら、こっちは下り、向こうは上りで、4 台の車が見えた。4 台目の車がこちらに向かってきた。 3 台の車が通り過ぎたところで、すぐに対向車線によけて、そのままどこも止まらず帰った。心臓バクバクだった。あの時、そのまま正面衝突していたら、二人とも確実に死んでいたし、あれは何だったのかと後で考えると、多分いなくなった人を探して行ったり来たりして寝ていなかったのかもしれないなどと考えた。

『災厄を生きる』の本で、河野先生が土着のこと書いていて、「そうだよ」と思っていたけれど、この話はしたことはなかった。その後、小野先生が若い人たちに出会って、あの時、死なないでよかったな、きっとそういう使命があったんだなと思った。不思議な大きな力がふっと車を離してくれた。わからないことをわかるというのは大事なことだと思う。

島津信子さん

震災の後、丸森も放射線量が高くて、山菜やきのこなど採れなくて、山に人が入れなくなった。手つかずのままになっているうちに、みなさん年をとって、山もお荷物になり、そういうところに眼をつけた関西電力が土地を買い、風力発電の話が持ち上がった。なぜそこに関西電力がくるのか。国有林

だから密かに行われていて、県民も直接関わっていないと知らない。町の面積の 7 割が山、山奥で、人が住んでいるかどうかわからないようなところ。蔵王にも計画があって、知事も反対して撤退した。いろんなところに計画があった。

3 年前に丸森も台風 19 号で被災して、ボランティアの方が入ってたくさん助けてもらった。自分は何もできていないと思っているので、情報をキャッチして、話を聞いたり、自分の眼で見たりしながら感じていけたらいいかなと思う。関西の方にも風力発電の計画もあると思うが、再生エネルギーが必要なこともわかるが、みんなで話していかなければいけないことだなあと思っている。

丸森のサトウヒデオさんは、足が悪くて避難できず、家に残った。周りは全部崩れたなかで、家は残り、ヘリコプターに引き上げてもらった。ヒデオさんは、「ただで空中散歩できたべ」「水の中に木がポツポツ見えるの。まるで松島みてえでなあ」と語る。いったいどういう精神なのか、逆境に強い。アイさんのノアの箱舟の話みたい。90 歳になられた。

目黒トミ子さん

こうして皆さんとお会いして、震災ってほんとに悪いことだけだったんだろうかと考えている。8 月 30 日、双葉町も避難解除されたが、駅周辺だけ解除になり、我が家の方はもう帰れないだろうというところに辿りついている。帰還と言っても、そんなに簡単なものではない。道路に立っても、もううちが見えないくらい木が覆いかぶさっている。一軒二軒の話ではない。本当に皆さんにお会いできて嬉しく思っている。

16 歳の娘さんの話を聞いて欲しい。「太平洋沿岸ではめったに見られない雪景色。小学 5 年生の兄は、家族 4 人と浪江町から避難した。車で 200 キロ走った先は、新潟県柏崎市だった。兄は転校先で、福島なんだねと言われ、軽い言葉だったと思うが、故郷の大切な言葉を笑われたように思ったのか、それから話さなくなった。人が変わった。転校して、マスクをつけると安心できると、帰宅してもマスクをはずさなかった。

避難先のアパート 1 ＬＤＫは 5 人では狭い。うるさいと苦情が入った。息を潜めて暮らした。故郷の家が恋しかった。双葉町にできる未来学園の話を聞いたのは中学 3 年の時。母や姉が卒業した学校を統合した学校ができると、説明会に行くと知っている人がいた。2015 年春、兄はマスクをして入学式に行った。ほとんど初対面だったが、校長先生が、君たちはここにある現実を少しずつ変えていける未来ですと言った。1 年 2 組のクラスメイトと一緒であれた。一期生はみな双葉郡出身で、転校先は居心地悪かった。避難先は狭くて声も出せなかった。みんな同じように悩んで、ここにたどり着いていた。4 年近くの避難生活で失われた大切な時間を少しずつ取り戻している。兄はマスクを離した。同郷で笑顔が戻る。

では、昔話をひとつ。怖い話。腕のいい漁師がいた。お嫁さんと 2 人で暮らしていたが、毎晩、夜遊びして帰る。お嫁さんは、毎晩、夜なべして亭主の帰りを待っていた。ある晩、戸を開けれと怖ろしい声がして、ランプ消して隠れていた。声はだんだん激しくなる。怖いから、今夜から早く帰ってくれと亭主に頼んでも、相手にしない。また怖ろし

い声が来て、いつもより激しく叫ぶ。戸を開けろ。ミリミリと戸を壊して、声の主が入って来た。そして、お嫁さんをバラバラにして殺してしまった。

亭主が帰ってきた。足に何かがひっかかった。ランプ探したれば、あたりは血の海だった。逃げた。嫁さんの首が後をつけてくる。一本橋、足で蹴ると首は川に落ちた。年月が過ぎて、遠くで稼いだ亭主は、ほとぼりがさめた頃だと思って、帰った。夏の暑い日だったから、川で身を洗っていると、川底から真っ白なしゃれこうべが出て来て、噛みついた。そのままボコボコボコボコと沈み、それっきりだった。

小野和子先生の最後のまとめでは、声の主は誰だかわからない。女の嫉妬ではなかったか。あるだんなさんは、ずいぶんしつこい奥さんだと言ったそうだ。別の奥さんは、こんでも足りないといったそうだ。

これだけいい会ができたので、福島県のいわき市に小中校があり、協力したいと校長先生と交渉したら、授業の一環ということで視察においでになってもかまわないと言ってくれた。小中の校長先生がちゃんとしたお話もしてくださる。子どもたちの様子、校長先生のお話をこれからの教育に活かして頂けたらありがたい。良い交流会だと思うので、一歩前進して双葉の方にもお

いで頂きたい。

小野さん

目黒さんは、ある日、ふっと、みやぎ民話の会に入って来られた。自己紹介の時、これまで 7 度目の引っ越しで宮城に来たという。ハンドバックひとつで校舎に集まって、放浪の旅が始まった。みんなあちこちさまよって、宮城県に落ち着いて、月 1 で集まっているという。話を聞きたいと言ったら、目黒さんは、外の人に話さないだろうと言って、自分自身で話を聞いて記録を書いて送ってくれた。

お一人お一人にひざを突き合わせて聞いた。テープレコーダーだとみんな話さないので、話してもらったことをその日の夜に思い出してノートに書いた。貴重な記録なのでこれを何かの形で残しましょうと言って、こういう冊子を作られた。我も我もと語ってくださる方がいて、結局 44 人になった。テープ起こしではなく、記録されたもの。非常に大きな収穫だった。

目黒さん

一番最後に小野和子先生に眼を通して頂けますかと言うと、いいですよと言ってくださった。17 機が再稼働を待っているそうなので、生々しい本、役に立つと思う。弊社責任はないと、責任ありませんとあの裁判の結果。国はみんなに任せて、13 兆円も使って、経営者はしっかり目を光らさないといけない。

小野さん

目黒さんは福島に避難して、ボランティアの方々へのお返しにと民話を初めて語っ

た。それから民話に縁が深くなっていく。民話ってそんな力を持っている。追い詰められて避難して行って、善光寺の集まりのなかで民話を語ったという目黒さんの美しさを思う。民話の力を思わずにはいられない。

震災の後、記録を 2 冊出したが、もう一冊、『閖上　津波に消えた街の昔の暮らし』という記録を作った。ハヤサカヤスコさん。彼女は消えてしまった閖上をもう一度呼び戻したい、そういう一冊ができたらどんなに嬉しいことかと、バラバラになった閖上に住んでいた方々を訪ねて聞き書きをして、昔の閖上を語ってもらうということをしてもらった。みなさんが生き生きと語ってくれたことが忘れられない。

小 1 の時に戦争が始まり、5 年生で戦争が終わった。飛騨高山の街の中央に家があった。家屋疎開といって、空襲が来たときに逃げやすくするために、うちを全部倒して壊せという命令が来て、8 月 15 日が締め切りだった。それで、家を壊している時に、天皇の放送が流れて来た。そんなことがあったので、絶えず心にわだかまるものがあった。生きているうちに確かなものにちょっとでも触れてみたいという思いがあって、その確かなものというのが民話だった。なぜかと言われても返事のしようがないが、名もない人たちが語り継いできて、放っておけば消えてしまう民話というものを何とか留めておきたい。それを留めておくことが平和な世の中を作っていくのではないかと幼いころから思っていたんだと思う。

鵜野さん

『災厄を生きる』の本にも書いたが、聞くって何か。単に耳から情報を入れるということではなく、入った情報を自分の体をくぐらせてリアクションしていく対話、そういう形で初めて聞くということが成立する。真剣勝負、命懸け。アレクシェービッチさんもさまざまなドキュメンタリーで、「自分は白紙の状態で相手と向き合う。私が聞きたいのは小さき人々の物語だ」と言う。戦争というと大きな物語が語られがちだが、小さき人々の物語。同じことをみやぎ民話の会のみなさんもしてきた。目黒さんも一人一人の物語を聴き取った。血肉化させながら記録していく。

小野さんは、本当のことを探し求めているとおっしゃっている。8 月 15 日までこれが本当だと思っていたことが 180 度ひっくりかえされて、本当のものは何だったかと見つけたものが民話だった。小さな物語のひとつひとつのなかに本当のことが詰まっている。

会が 50 年近く活動してきて、これからどんなふうに進んで欲しいか聞きたい。みやぎ民話の会のこれから。

加藤さん

聞く力について、震災後、ゆうわ座開いたりして眼から鱗が落ちるように見えてきたものがある。この十年何もできなくて、聴いてきた話を必死になって文字で起こすなかで、語るって、眼とか手とか表情、放つ何かを含めてだと思う。聞くことで、自分が変わっていく。残り少ない人生で何ができるのかなと模索しながらやっているのが現状。

島津さん

これまでずっと小野先生に頼りすぎたな

と。希望としては、小野先生に安心してもらえるような動きをしたいと思っている。そのためには自分が何をしたいのかを考えて、自分なりのものを自分で作っていかなければと思う。丸森の仮設で聞いているが、そのなかに同級生がいて、夫を亡くし、私も知らない小さな位牌があった。満州で亡くなられた兄だったという話を聞いた。

シベリア抑留のこととか、昔は語りたくなかったが、90 や 100 歳になって、「今、語らなくてどうする」と伝えたいと思っている人がたくさんいる。今、知ってるのは自分しかいないという人もいて、そういう話も聞いてみたい。瀬尾夏美さんは、東京に戻り、東京の大空襲の話とか、聞き書きをして、全国飛び回っている。自分で見つければやれることはあるんだなと。丸森のスズキエツロウさんの語りが素晴らしいのでまとめたいと思っている。

きのうスズキさんと話した。「太陽光の電話がよくかかってきた。昔からしてるさ。屋根でねえ、もっと上だ、ソーラーだー」っておっしゃる。

目黒さん

2011 年に宮城の民話の会に入会させて頂いて、それがなければとっても寂しい人生だったんじゃないかと思っている。みなさんよい方だから。

小野さん

困りましたね。まだ私は歩けば歩けると思うのに、会の歩きが止まっている。何の希望も持っていないと言ってもいいかもしれない。会にも民話にも。つまり、気がついた人から何かを始めてくれるので、ほとんど希望は持っていない。とても大変なことだったし、頑張ってくださいとは言えない。加藤さんも島津さんも仕事を持っていた。私は仕事を持ったことがない。肩書は主婦。みなさん何もないところからのスタートだから、それぞれができることをやっていけばいい。小野ができることは全部やってきたので、さばさばした気持ちなんですよ。みんな自由にやっていけばいい。

村本

災厄が起きていても、それがなければなかった出会いがあり、人生が深まり新しいことが開けていく。そうやって先輩たちも生きてきて、それを民話に語ってきた。薄っぺらい昨今の社会に厚みを与えてくれている。感謝。福島については一区切りできないので続けていこうと思っている。多賀城の方々が自分たちで続けてくれているので、お客さんの形で伺う。蜜にならないように院生半分しか連れて来れなかったけれど、また院生たちに伝えてもらいたい。

9 月 3 日(土) 多賀城プロジェクト

この日のメインプログラムは、おおぞら保育園のトレーラーハウスで、プロジェクト実行委員の丸山隆さん（多賀城市教育委員会）と黒川恵子さん（おおぞら保育園）との交流会だった。会場となったトレーラーハウスは、私たちのプロジェクトが 2012 年に初めて訪問し、黒川さんと出会った場所である。当時、このトレーラーハウスで保育が行われていた。

いつもプログラムを実施するので慌ただしいが、今回はゆっくりお話を伺うことができたのは貴重だった。

黒川さん

あの日、子どもたちとトトロの「さんぽ」を歌いながら、砂押川沿いに避難した。子どもたちは誰も泣かなかった。避難直前に持ち出したおやつやお茶が役立ち、避難所では暗く寒いなか、窓の外の赤い火の影を子ども達に見せないようにして過ごした。夜は乳児を抱いて体温で温めて眠った。

その後、しばらくはトレーラーハウスで保育を行っていたが、新たな保育園の場所を見つけなければならずどうしようもない時に、偶然一軒の空き家を見つけた。空き家の隣家に尋ねると、持ち主はその隣家の方で、ちょうど借主を探していたところだった。もしあの一軒家が借りられなかったら…。見えない力が働いた。

この 10 年間、頑張って来れたのは、もっと生きたかったのにそれが叶わず亡くなられた方々の無念を晴らしたいという想いがあったからだと思う。

丸山さん

自宅も被災し、被災者だったが、行政職員として長期に渡って避難所運営に携わった。避難所生活は、狭い空間で、先の見えない不安の中で集団生活を長期間強いられることになる。ストレスが蓄積し、それによって多くの様々なトラブルが起こった。電気やトイレなど生活に関わる問題にひとつひとつ

対応した。

東日本震災は建物の倒壊は少なかった。津波は逃げれば助けられた、助かった。逃げることは勇気のいることだが、同時に命を守ることであり、災害時にはそれが一番大切であることを忘れてはいけない。

他都市からの応援、ボランティアの支援、義援金等全国からの支援に支えられた。震災翌月の４月７日、長野県から１週間応援に来てくれた県職員が帰途に就くにあたり送信したメールがある（配布資料）。「おかしなことを書きますが、私は全く疲れておりません！確かに肉体的な疲労の蓄積は多少ありますが、心はとても充実し、元気です！なぜなら、《悲惨》という言葉を上回る《感謝の出会い》があったからです！・・（中略）・・必ず元気な東北、強い多賀城を築き上げ、支援して頂いた皆さんに感謝の恩返しをして参ります」。

これが十年経った今も、変わらない私の思いである。どうしても震災の記憶は薄れる。それは仕方が無いことだが、立命館が毎年、訪れて話を聞いてくれる機会が継続していることで、そのたびに私たちも震災経験を思い出すことができている。

その後、多賀城市文化センターで、団士郎漫画展と漫画トーク、防災コンサートに参加した。なお、漫画展は８月 27 日（土）から９月 11 日（日）まで開催されていた。多賀城市文化センターは、多賀城での最初のプロジェクトを開催した場所である。翌年より会場は多賀城市立図書館へと移り、以後、現在まで、当時館長だった丸山さんが本プロジェクトを引き継いでくださっている。

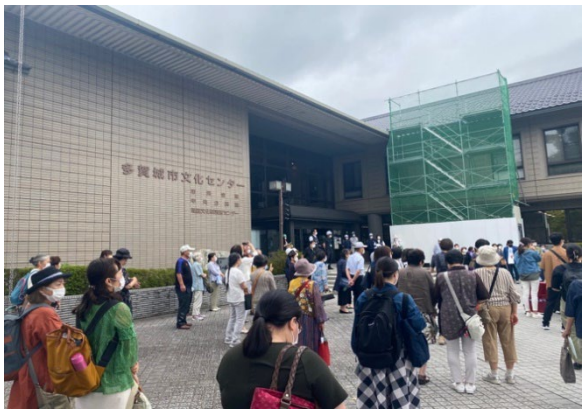
今回は、漫画展開催時より、NHK が張りつき取材し、院生たちも取材を受け、何度か放映された。そのうち Web 記事にもなっているものを紹介する（いつまで視聴可能かは不明）。プロジェクトを広く知ってもらうとともに、院生たちにとっては、マスコミがどのように取材し、それがどのように切り取られて社会に発信されるのかということを学ぶ良い機会にもなったと思う。

宮城 NEWS WEB　仙台放送局「被災地で続く家族漫画展　多賀城」2022 年 8 月 27 日
https://www3.nhk.or.jp/lnews/sendai/20220827/6000020714.html

宮城 NEWS WEB　仙台放送局「京都の大学院生　津波で前回の保育園長から震災学ぶ」2022 年 9 月 4 日
https://www3.nhk.or.jp/lnews/sendai/20220904/6000020815.html

宮城 NEWS WEB　仙台放送局「震災を描かない漫画展　被災地で支持されるのはなぜ？」2022 年 9 月 12 日
https://www3.nhk.or.jp/lnews/sendai/20220912/6000020929.html

NHK 知っトク東北「被災地を描かない漫画展　支持される理由は」2022 年 9 月 16 日
https://www.nhk.or.jp/sendai-blog/telemasa/473468.html



多賀城市消防局による避難訓練コンサートに参加した後は、自由なフィールドワークの時間とし、院生たちは、NPO 法人タガの柵による「都市型津波を学ぶ 3.11 語り部ツアー」への参加や、東北歴史博物館、松島などへ訪問した。夜のうちに白河へ移動。

9 月 4 日(日) 白河プロジェクト

この日は、白河市立図書館（りぶらん）にて、「東日本・家族応援プロジェクト＋プラス 2022 in 白河」を開催した。昨年に引き続き、NPO 法人しらかわ市民活動支援会との共催、一般社団法人未来の準備室、特定非営利活動法人ビーンズふくしまの協力を得た。ボランティアの高校生たちも合流し、業務分担して、全員で協力運営した。

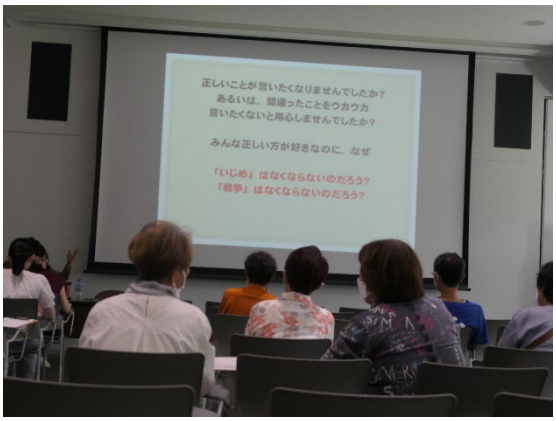
プログラムは、「あそびのひろば」（しらかわ語りの会によるふるさとの民話、ライアーアンサンブル・ドルチェによるライアー演奏、鵜野祐介による手遊び唄とお手玉あそび）、「おもちゃであそぼう」、団士郎漫画展と漫画トークである。なお、こちらでは、8 月 29 日（月）から 9 月 4 日（日）、漫画展が開催された。

今回、「しらかわ語りの会」会長の鳴島あや子さんがふるさとの民話を語ってくれたが、長年保育士をしておられたとのことで、年齢の低い子どもも多かったが、指人形や手遊びをアドリブで挟みながら子どもたちの関心を惹きつけ、うまく進められたのには感心した。

その後、共催、協力団体であるビーンズふくしまのふくしま子ども支援センター、おひさまひろば、一般社団法人未来の準備室のみなさま、しらかわの高校生ボランティアたちとの交流会を持った。「ママカフェ@しらかわ 震災 11 年を聞く」や未来の準備室コミュニティ・カフェ EMANON による高校生振り返りのためのワークショップの企画もあった。

小磯さんは東京出身で、震災後に東京に避難する選択肢もあったが、福島にとどまる選択をした。この土地が好きだからという理由だった。当時子どもは 10 代で成長期にあり、放射線量を気にしながら県外の食材を使用し、一つ一つ安心できることを模索していきながら過ごしてきたとのことであった。ママカフェをやっている三浦さんによれば、福島の子どもたちは 2 年ごとに甲状腺検査を受けており、この検査結果を後日郵送で受け取るたびに、もしも悪い結果だったらどうしようという強い不安がよぎるとおっしゃっていた。これまで白河で子育てしてきた女性たちの声を聞く機会はあまりなかったので、貴重な機会だった。

終了後、マイクロバスでいわきへ移動。夜は古滝屋の温泉で疲れを流す。


正しいことが言いたくなりませんでしたか?
あるいは、間違ったことをウカウカ
言いたくないと用心しませんでしたか?
みんな正しい方が好きなのに、なぜ
「いじめ」はなくならないのだろう?
「戦争」はなくならないのだろう?

ままカフェ@しらかわ
震災１１年を聞く

もしも私が、
のび太だったら
こんな道具を
出してもらいたい!
(自分で考えた道具でもOK)

9 月 5 日(月) 沿岸部フィールドワーク

伝言館

沿岸部フィールドワークのメインプログラムは、600 年以上の歴史のある宝鏡寺にある伝言館の訪問だった。伝言館は、2021 年 3 月に設立された木造の建物である。伝言館館長で宝鏡寺第 30 代住職の早川篤雄さん、副館長で立命館大学名誉教授の安斎育郎先生のお話をお聞きし、伝言館を見学した。館内には、原子力発電所の事故関係の資料や、過去の核兵器による戦争や被害の資料があふれていた。

早川和尚

来月誕生日で 83 歳になる。安斎先生も同じ年。原発に不安を持って声に出し、裁判を起こして物を申す行動を起こした。安斎先生は専門の立場から原子力を研究し、疑問を持って警告を出した。全国初の公聴会を開かせ、安斎先生は専門家として、私は住民として出会い、以来、一緒にやってきた。

事故後、安斎先生はずっと被災地に関わってくれ、毎月おいでになる。2018 年に「悔恨・伝言の詩」を持ってきてくれたので、これを石に刻んで残そうと考えたのがあの碑。安斎先生がいなかったら、住民の立場はあっても、専門的見地にはならなかった。

コロナ前、全国からたくさん来館者がおいでになった。若い方が来てくれると非常に嬉しい。伝言の部分を受け取って頂けたら。

安斎先生

東大の工学を出て、医学部に就職し、アカハラにあいながら原子力発電に疑義を呈し、立命館に来て平和学を教えていた。この寺は 1893 年創建、大円山智相院宝鏡寺というが、太平洋戦争では、お寺も金属などを供出させられ、百軒あまりあった檀家の若者が 20 人以上死んでいるそうだ。12 月 8 日からの特別展は、宝鏡寺の太平洋戦争。

1973 年に反対運動で和尚と出会い、半世紀おつきあいしてきた。住民も結構頑張ったと思う。国家や大資本に抗うのは大変なこと。70 年代には慣れないなか手探りでやっていた。戦後十年は、米軍の管理下にあり、ほとんど何もなかった。1954 年にビキニ事件があり、1961 年にはソ連がサハラで世界最大の水爆実験をやった。その衝撃は

地球を3回回ったという。そんなに大きな水爆を作っても、放射能だらけで入って行けなくなるから使い勝手が悪い。それでも競争があった。

ビキニ事件をきっかけに日本の原水爆禁止運動という最初の市民運動が起こったが、内部の政党レベルの対立が持ち込まれ、外国からの干渉もあり、60年代には市民が参加できないような政党運動に分裂してしまった。1957年に岸信介が自衛のための核兵器は憲法違反ではないと言った。1960年代には安保闘争、ベトナム反戦運動などあったが、池田隼人が所得倍増計画を打ち出し、高度経済成長期に環境問題を無視したために四日市ぜんそくなど公害、環境問題も起こり、市民運動がないまぜになってみんな参加するようになった。

70年代に入ると、いよいよ原発の出番で、アメリカが「大気を汚染させない原発をどうぞ」と日本に持ち込んだ。1968年にここから一番近い福島第二原発の計画が発表され、71年に第一原発が運転を始めた。この国が原発列島化する初期に福島が狙われたのは、もともと福島は、常磐炭鉱、水力、火力と、エネルギー源を引き受ける県だったこともある。電力会社の人に言わせると、原発を持ち込むには、①保守の地盤が強いこと（反対運動が起こらない）　②経済的地盤が弱いこと（お金で丸め込める）　③自然科学的な地盤は三の次でいいということらしいが、まさにここが狙われた。70年代を迎え、1972 年の田中角栄の列島改造論から1974 年の電源三法から地方交付金がたくさん出るようになった。

1973 年に和尚からお声がかかった時には、東大医学部の助手だった。その前の年に日本学術会議で初めて原発問題のシンポジウムを開催することになって、若干32歳だった自分が基調報告者に選ばれた。当時の学術会議は、もっと民主的だった。30万人の科学者の有権者から立候補して、科学の7つの分野につき30人ずつ代表者を選び、国会議員と同じやり方で決めていた。今は学会で有力な人が任命されるが、市民運動に関わる科学者たちが任命されていた。貼ってある6項目の点検基準は、当時の原発反対運動の指針だった。

福島第二原発一号炉をめぐって公聴会を開けと言って、1973年9月18日に最初の公聴会を福島市で開いた。これはとんでもない茶番劇だった。住民の声を聞いたと言うが、総動員して賛成派に申し込ませて、申し込んだつもりがない人にも通知があって発覚した。圧倒的多数の賛成派がしゃべることを圧倒的多数の傍聴人が聞くというものだった。

その後、福島大学の科学者や弁護士、東京や東海村の科学者が協力して、「60 人の主張」というものを作った。自分たちが公聴会で答弁するならこういうものだという声を本にしたもの。住民と専門家で、1975 年に裁判を起こした。取り消し訴訟、17 年かけて出た福島地方裁判所の判決は、「冷却水が途絶えたらとんでもないことになるというような住民側の主張は想定できなくはないが、そういうことを言い出すと、事実上すべての原発は運転できなくなる。だから想定しない」というものだった。原発を動かさないことは起こらないことにするということだ。ただ、裁判をすれば、資料を出さざるを得なくなるので、それを眼にすることができる。詳細な安全審査はやらないことがわかり、そういう意味ではやった甲斐はあった。まだ若かった早川さんが地域住民束ねて頑張った。

1960 年にチリ地震、マグニチュート 9．5。あれ級の津波が襲ってきたら、福島の原発は大変なことになると、その時期から訴えていた。非常用電源が水没して、そのとおりになった。「これは最悪ではなく、3 月 11 日は不幸中の幸い。海に風が吹いた時期だったが、夏だと陸に風が向くので、もっと大変なことになっていた。これが最悪だと思うなよ」和尚が警告している。

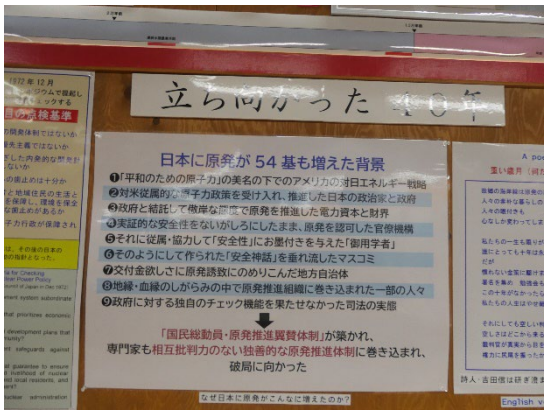
今もまだ、中にマグマが沈み、格納容器まで溜まっている。今年、ロボットを使って数グラム取り出したが、全部取り出すことはできない。そして、取り出したものはどこにいくのか。強烈な放射能で、引き受けてくれる県があるとは思えないし、福島の山手のどこかに埋めるのか。放射能がなくなるまで何万年もかかる。地下水脈にぶつかったら爆発するから、たえず冷やし続けないといけない。あれがある限り、福島の住民は故郷に帰りたくない。このあたりは数百年に 1 回は地震がくる。40 年で取り除くと誰かが言っちゃったからそういうことになっているが、とてもじゃないけれどできない。百年規模で時間がかかる。

原子力を最初に本格的に学んだ東大 1 期生 15 人のなかで 13 人生き残っているのが年に一回集まって飲む。みんな意気消沈している。どえらい仕事をやってきた人たちがこんなことになるはずではなかったと。廃炉作業には 3 年の出向で来ているが、それでは本気にならない。廃炉措置をやっている技術者や科学者を公務員にして取り組むべきである。全部国家公務員にして若い人どんどん入れて、新エネルギープロジェクトと両方に関わってもらうなどするとかしなければ復興も絵空事。

2018 年に詩を書いた。国家権力に抗ったけれど、牙を抜くのを防げなかった悔しい思い。和尚に見せたら、石に刻んで残そうと、アフリカ産の何百万もする黒い石に刻んだ。科学の認識をきっちりすること、人間への限りない愛を土台にして、権力に対峙

することを怖れてはいけないと伝言を伝える施設を作ろうということになった。和尚が東電の賠償金と私財を投げうって作った。

この部屋は特別展示のためのもので、今日から始まった。歴史を押さえないといけない。お釈迦様の世界認識。和尚が「これによりてこれあり、これなければこれなし」と書いた。太平洋戦争のように無謀なことをしたために、従属国家になり、アメリカのアイゼンハウアーが国連で安全エネルギーだと言って、こんなことになってしまった。



早川和尚

行動に移したのは1972年。71年3月26日に第一原発が動き出した。その前に、双葉原子力地区開発ビジョンというのが 1968年 3 月にできている。後になってこの存在を知った。国や東京電力、東北電力が作ったもので、3章からなり、冒頭に、一般的に言って、送電コストを含めた発電コストのこと、人口密度、産業水準の低い所を見つけると書かれている。「何だこれ」と気づいた人があって、全部解消された。現在は国会図書館にしかない。1953年12月8日にアイゼンハウアーが原子力の平和利用を言った時、危険性は知らされなかった。福島の復興というのも同様に安全神話。あるのは10万年先。燃料デブリが無害になるには 10 万年になる。そして、その予算はみなさんから取られている。だから復興はそこから後の話になる。

楢葉町には高速の降り口に遺跡があった。旧石器時代の遺跡で3〜4万年のもの、原発が無害になるまでその3倍も4倍もかかる。

双葉駅周辺

その後、グループに分かれてのフィールドワークとなった。私たちは、双葉駅周辺へと向かった。途中、道路上の線量計が間引かれ減っていることに気づく。黒いフレコンバックも見えない。しかし、大熊の帰還困難区域には、黒いフレコンバッグの山に緑のシートをかぶせたものがあり、周囲には木が茂り始めていた。このまま見えなくなっていくのを待っているのだろうかと思ってしまう。

この日は、ちょうど駅前に双葉町役場新庁舎がオープンした日で、駅前には芸能人が来ており、テレビカメラが入っていた。メディアが見せるのは、切り取られたこの風景だけなのだろう。駅のインフォメーションセンターには 2 人の女性スタッフがいて、お一人は 6 月に対応してくれた人だった。今回は 20 代くらいの若い女性が対応してくれた。神奈川の人らしい。聞いてみると、双葉に戻ったのは知っている限り 2 世帯で、交番と役場の若い人。駅裏の公営住宅が 10 月に完成すると 27 世帯は入れ、20 世帯はすでに決まっている。移住者もいるという。

役場の中にも立ち寄ってみたが、昼休み中だからか電気を消し、暗い中で、たくさんの職員が弁当を食べたり、パソコンに向かったりしていた。後で聞いたところによると、百人の職員がいるという。

双葉駅の裏も解除されたので、線路をわたってみるが、線路には「窓をあけて安全確認を」の看板があった。あまり見ない看板の文句だと思うが、アピールなのかと思ってしまう。公営住宅の工事が進んでいた。

今回、とくに印象的だったのは、双葉町の光と陰だった。6 月にも福島県沿岸部を訪れ、特定廃棄物埋立処分施設の見学をしたが、昨年末まであちこちで眼にしていた黒いフレコンバックの山が見られなくなっていた。これは、たしかに復興計画に沿っており、住民にとっては少なくとも悪いことではないと思う。

それでも、見えなければ問題はなくなったのかと言えば、そんなはずもない。帰還困難区域を車で走っていると、緑のシートをかぶせたフレコンバックをたくさん見かけ、周囲には木が生え始めていて、人が帰ってこないところでは、時間経過とともにフレコンバックを包み込んだ森になっていくのだろう。

双葉駅周辺のごく一部だけを切り取ってみれば、ピカピカの新しい町の誕生の物語になるが、その場所からほんの少しだけ離れると、まったく異なる風景が見えてくる。福島に関心を持って遠方から短い時間で訪問する人々は、見えるものから復興の物語を受け入れるかもしれない。そうなれば、復興したのに帰還しない人々は、それぞれが好きな選択をしているだけだと考えるだろう。双葉町のある人が、「自分たちは避難しているのではない。避難させられているのだ」と言った。そのことのリアルを知って欲しい。

飯舘村

それから道の駅なみえでなみえ焼きそばを食べ、飯舘村に向かう。飯舘村にはたくさんのフレコンバック。やはり緑のシートをかぶせ、植物が生えてきている。長谷川さんの蕎麦畑には、蕎麦の花がきれいに咲いていたが、周囲はフレコンバッグが山と積まれ悲しかった。

宿に帰って、食事をしながら、それぞれのフィールドワークで経験してきたことを報告し合う。院生たちのグループは、それぞれ、震災遺構請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館、東京電力廃炉資料館を訪れたり、富岡町散策をしたりしていた。

双葉町では、マイクロバス、レンタサイクル、徒歩などグループによっていろいろな手段で回ったようだが、8 月 30 日に特定復興再生拠点区域の避難指示区域を解除され、住民の居住が可能な区域となったものの、その現実に吃驚し、「この街が本当の意味で生きた街になるのにあとどれだけの年月を要するのか想像もできない」と漏らしていた。

9月6日（月）Ｆスタディツアー

最終日は、全員で、古滝屋Ｆスタディツアーに参加した。いわき湯本温泉古滝屋第16代当主里見喜生さんのガイドのもと、まずは古滝屋内にある考証館を案内頂いた。

院生たちの眼を惹きつけるのは、やはり、木村紀夫さんのインスタグラムだろう。当時小学１年生だった娘さんが津波で行方不明となったが、原発事故のために捜索ができず、父親自身が５年９か月を経てようやく遺骨の一部が見つかったという捜索現場を再現したものである。

その場所は、人間が立ち入らない間に、古代の植物が生え、絶滅危惧種の鳥も集まってきて、フカイの森のようになりつつあった。サンクチュアリだと思っていたが、そこにもまた防潮堤ができることになった。木村さんのFBでは、きのう「ついに・・・」という言葉とともに、虎ロープとショベルカーの写真が貼られており、落ち込んだという。誰も棲まない場所のはずだが、利権なのだろうか。

それから、マイクロバスで双葉郡を中心にガイドして頂いた。

富岡町では太陽光発電のパネルが広い敷地に一面張り巡らされている。当時は美しい田んぼだったが、放射能被害で農地が価値のないものとなってしまった。むごい光景だ。

それから、いつものように夜ノ森駅の前でバスを降りた。オリンピックに合わせるかのように 2020 年に新設された駅構内から外を見ると、線路の左側には新しい住宅が並び、車が置いてあって人が住んでいる一方、右側はまだ立ち入り禁止区域となっている。線路一本が放射線を遮るのか。奇妙な光景である。

立ち入り禁止区域には、11 年前の震災当時のまま放置された自販機や家々が残っている。元は新興住宅地であったということ

で、おそらく新築だったと思われる家も、雑草に覆われていた。すでに解体された家の跡地にも草が生い茂る一方、いまだに持ち主と連絡がつかず放置されたままという家もあり、窓ガラスが割られ、玄関がこじあけられて中のものが盗まれていた。

それから富岡アーカイブ・ミュージアムへ。これは、富岡町の博物館で、地域資料や、東日本大震災と原発災害で生じた震災遺産を収蔵・展示している。「複合災害を地域の歴史に位置づける」を目指し、地域で長い時間をかけて積み重ねられてきた日常が覚悟なく奪われた事実を町・町民の目線で伝え、「あの日」を境に起きた地域の変化を紹介

しているという。

HP によれば、富岡町を中心に近隣地域の「歩み＝歴史」を残す拠点（残す）、富岡地域を中心に近隣を含めた「地域の特徴」を継承・発信する拠点（まもり、つなげる）、地域の運命を変えた震災と原子力災害を歴史の大きな「1 ページ」に位置づける拠点（記録する）、「人類初」とされる我々の経験を後世に伝え、将来と世界に教訓を発信する拠点（学び伝える）、「こころの復興」につなげる町民や地域住民の交流の場、交流人口・関係人口拡大の場（交流）をその思想としている。

ミュージアムにはひしゃげたパトカーが展示されてある。東日本大震災の発生当日、2 人の警察官が使っていた車両で、町民を避難誘導していたが、大津波に襲われた。このパトカーは、立ち入り禁止区域に放置されていたが、2015 年に町民の希望で公園に移設されていたものだ。この公園には、現在、この警察官らを含む町民の慰霊碑があり、絶やさず花が手向けられているようだった。

つづく